

Sheela Agarwal のリゾート地域の サイクル論と海辺のツーリズム ——サイクル論の適用可能性と有効性の検証——

中 本 誠 一・中 崎 茂

1. はじめに

本論は、カナダの経済地理学者であるバトラーが1980年に発表したリゾート地域のライフサイクル論について、そのサイクル論の特性を概観するとともに、それをイギリスの Torbay に初めて適用し、そのサイクル論の妥当性や課題を明らかにしたものである。

リゾート地域（日本では観光地域を含めて）は、その誕生からその後の成長の様相を中・長期的に概観すると、様々な推移のパターンが見られる。それらにほぼ共通したサイクルのパターンには、徐々に成長し急速に発展をとげ、その後成熟し次第に衰退する各段階が見られる。これらの各段階の組み合わせによりサイクルの多様な形状が生じる

サイクル論の中の一つのパターンが、バトラーのS字型のサイクル論である。このバトラーのサイクル論については、Agarwal が本論で概観しているように、その妥当性が多くの研究者によって検証される一方で、その適用面における課題も指摘されている。それだけバトラーのサイクル論は多様な側面を内在しているとともに、汎用性の面で不十分な点があることを示唆している。Agarwal は、このバトラーのサイクル論の特性について、イギリスの南西部に位置する Torbay を調査の対象地域としてとりあげ、実証面と論理面から考察を加えている。この調査対象とした Torbay は、1968年に Torquay、Paignton および Brixham が合併した広域な海辺リゾート地域である。Agarwal のこの論文は、この3つのリゾート地域とそれらが合併した Torbay の双方について、バトラーのサイクル論と関連づけその妥当性や課題を考察したものである。これまでのバトラーのサイクル論の意義や課題の考察は、Cooper を初めとする論理的な面と、Hovinen を先駆とする実証的な面から試みられているが、Agarwal のこの論文は、後者の実証的な面から考察したものといえる。とくに、バトラーのサイクル論で課題とされた「分析の範囲」問題を実証的な面から考察する手掛かりを与えており、海辺リゾート地域の発展を論じる上で有意義な論文とみなされている。このような意義をもつ Agarwal の論文を著者および出版社の許可を得て翻訳し、向学の士の研究に寄与できることは幸いであり

ます。

なお、イギリスの海辺リゾート地域の研究に際してこの Agarwal の論文を紹介していただいた駿河大学の西岡久雄先生には、この場を借りて御礼申し上げます。先生のこの論文に対する評価が、現地を視察し本論文を翻訳する契機になりました。私達が Sheela J. Agarwall を Sheffield Hallam 大学に訪ねた時の彼女のプロフィールを、ここに簡単に記しておきたい。彼女は SHU ツーリズムセンターの the School of Leisure and Food Management で観光経営学 (Tourism Management) を担当している新進気鋭の上級講師である。1995年 Exter 大学でイングランド海浜リゾート地域の再開発研究で博士号を取得し、現在、地域経済開発の研究、イングランド・リゾート地域の企画・経営に関する再開発研究等を理論的かつ実証的両面から取り組んでいる。また地域開発が体系化される方法論に大きな関心を持ち、開発地域の経済的側面、特に構造変化の効用、影響、プロセスと結果にいたるまでの諸問題に関心を広げている。

日本語の転記載に対して、Sheela J. Agarwal 及びイギリス Elsevier 社の “Tourism Management” Vol. 18, No. 2, pp. 65-73, 1997 に感謝の意を表します。

Acknowledgment for permission to reprint in Japanese is extended to Sheela J. Agarwal and Elsevier, Oxford, UK. “Tourism Management” Vol. 18, No. 2, pp. 65-73, 1997.

2. 概 要

本論は、リゾート地域サイクル論の適用可能性 (the applicability) にかかわる環境条件について、英国 (Britain) の南部にある海辺リゾート地域と関連づけながら、考察するものである。

はじめに、バトラーのリゾート地域サイクル論の概要を、その手法面の課題や制約条件を中心に明らかにする。本論の2部では、広汎な研究の枠組みとしてこのリゾート地域サイクル論を特定のリゾート地域 (イギリスの Torbay - イギリスで最もよく整備された海辺リゾート地域) にあてはめて、そのモデルの実証性を検証する。その結果、「分析の単位 (unit of analysis)」が重要とみなされ、またサイクル論を運用する際の難しさも明らかにされた。それに加えて、持続的なリゾート地域の進展のためには、海辺リゾート地域の復活や若返りの方策も重要とされた。

キーワード：リゾート地域のサイクル、海辺リゾート地域、適用可能性、再生・復興

本 論

イギリスの海辺リゾート地域の成長や衰退の現象は、一般的に言えばバトラー¹⁾のサ

イクル論の概念を立証しているように思える。すなわち、第二次大戦後、観光旅行が盛んになり、国内の観光旅行市場の75%は、海辺リゾート地域²⁾が担ってきた。しかし、1970年代の後半になると、海外のリゾート地域との競合—旅費の逡減や安価で質の高い観光旅行市場の出現—によって、伝統的なイギリスの海辺リゾート地域の繁栄は、本質的に変容するようになった。1980年代の終わりになると、このような海辺リゾート地域の多くは、長期にわたり観光旅行市場が衰退を示すようになった。このような包括的な変化は、バトラーのサイクルモデルの適用可能性に関する研究を裏付けるもの³⁻⁷⁾、といえる。

ごく最近になって、国内のリゾート地域のダイナミックな変動と関連づけて、バトラーのリゾート地域サイクル論の有効性について、多くの関心が寄せられてきた⁸⁻¹²⁾。

リゾート地域のサイクル論に関して相当数の研究があるにもかかわらず、サイクル論の有効性、適用可能性や普遍性 (applicability and universality) については、いまだ十分に証明されていない¹⁰⁾。それゆえ、このサイクル論がリゾート地域の進展に関する今後の研究に寄与するためには、詳細な分析 (further detailed analysis) が必要となる。

(1) リゾート地域サイクル論の概観——従前の研究成果

1980年にバトラー¹⁾は、リゾート地域が進化するというサイクル概念 (an evolutionary cycle) を明かにした。すなわち、あるリゾート地域の発展の様相を旅行者数とインフラ整備の状況によって幾つかの進化の段階として示した。それによると、サイクル論は6つのステージから成り立ち (図1)、各ステージはそれぞれの特徴を示している (表1)。このサイクル論の中で「探検」「関与」「開発発展」「成熟」の各段階は成長局面を

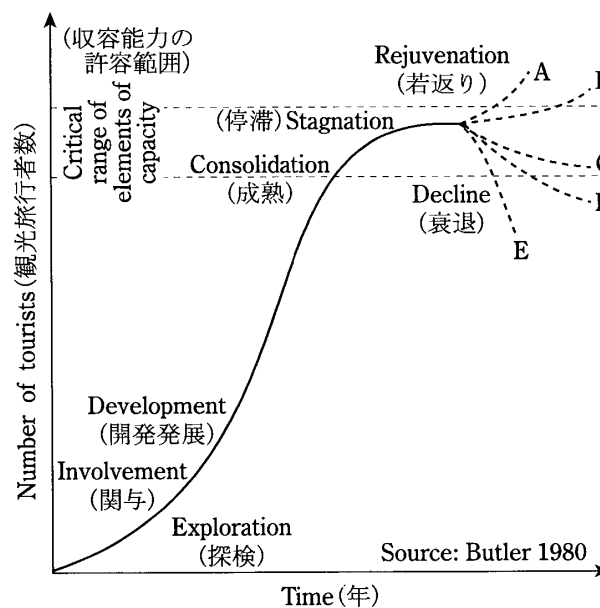


図1 リゾート地域のサイクル

表1 リゾート地域の各発展段階とその特徴

段 階	特 徴
探 検 段 階	<ul style="list-style-type: none"> ・探検的な旅行者で人数は少なく公共施設の無い場所を訪れる ・自然環境に特徴のあるリゾート的な場所に引きつけられる ・訪れる人は質の高い自然をとくに好むタイプである
関 与 段 階	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民と旅行者との相互の関わりは限られており、観光産業が発展するのに伴い基本的なサービスが提供される。 ・宣伝活動が活発になると、入り込みに季節変動が生じてくる ・明確な観光市場が誕生するようになる
開 発 発 展 段 階	<ul style="list-style-type: none"> ・新たに観光施設が整備され、売り込み活動が盛んになる ・地域外の人が観光活動を大きく左右するようになる ・最盛期に観光旅行者数は居住者数を大きく上回り、後者は前者に対して反感をもつようになる
成 熟 段 階	<ul style="list-style-type: none"> ・観光が地域経済の主要な位置を占めるようになるが、成長率は横ばい状況となる ・観光産業地区という明確な地域の範囲が形成されるようになる ・比較的早く衰退傾向にある施設のいくつかは、二流のものとみなされる ・地域サイドでは観光シーズンを拡大する努力が払われる
衰 退 段 階	<ul style="list-style-type: none"> ・観光旅行者数と受け入れ規模はともにピークとなる ・リゾート地域としてのイメージが確定してきたが、もはや流行遅れとなっている ・宿泊施設は徐々に衰退しており、施設の稼働率は高まる
衰退以降の段階	<ul style="list-style-type: none"> ・5つの可能な方向があり、その選択は、ある程度地元の経営管理の決定による。その極端な場合が再生であり、低下である

出典：Butler¹⁾から編集したもの

示し、他方「停滞」段階は衰退局面を示している。このサイクル論の最後の段階は、「停滞以降 post-stagnation」の局面と特徴づけられ、この局面ではさらに5つの選択方向が想定されている¹⁾。

衰退という局面は、観光旅行市場が縮小し、しかも新たに競合するリゾート地域が出現した時に生じる(図1 サイクル曲線のC、D及びE)。しかし、何らかの対応策—例えば①観光資源の利用転換、②環境条件の改善あるいは③観光旅行市場の特性に対応した観光地域の見直し—が採択されるなら、[観光旅行者の]減少は解消し、[図1の]曲線AやBのように様々に回復することが可能となる、かも知れない。

様々なリゾート地域に対して、リゾート地域のサイクル論を適用できるのかどうかという研究が進む一方で、そのサイクルの形状やパターンおよびそれらに係わるパラメータに関して、多くの論争が生じるようになってきた。つまり、その論争とは、サイクルの正確な形状に関するもの、サイクルのパターンに関するもの、およびサイクルに関連する変数など、である。

Meyer-Arendt は、アメリカのルイジアナ州のグランド／アイルのリゾート地域を研究してバトラーのサイクル論の適用可能性を確認している⁴⁾。Wilkinson は、カリブ海のアルバ島、セント・ルーシア、アンテグおよびアメリカ統治のヴァージン諸島に関するサイクル論を研究して、バトラーが仮説したサイクル論と同じような成長と発展のパターンが見られることを明らかにした⁵⁾。さらに Smith¹³⁾ は Snow と Wright¹⁴⁾ のコニーアイランド (Coney Island) における観光開発の初期段階の研究をもとに、そのリゾート地域のサイクル的な成長と衰退の形状がバトラーのサイクル論と同様のパターンを示すことを、示唆している。

それとは対照的に、Hovinen は、アメリカペンシルバニア州のランカスター郡における観光旅行の調査・検証から、バトラーのサイクル・モデルは観光産業の進展を十分に特徴づけていないとみなしている³⁾。つまり、時とともに、観光旅行者が増加傾向を示すカーブの形状はランカスター郡の場合、バトラーのサイクルモデルが示している形状と異なっており、しかも、進化の各段階の現れ方も異なっている。さらに、ランカスター郡の事例の研究についてみると、各進化の段階に見られるそれぞれの特徴はバトラーの提示したものと異なっている、と論じている¹²⁾。Baker は、五大湖にある Port Stephens について研究し、各進化の段階の特徴についてみると、バトラーの提示した特徴・内容との間にギャップがあること、を明らかにした¹⁵⁾。さらに Cooper は、マン島 (the Isle of Man) の観光旅行を研究し、観光旅行者の動向やその進展の各段階は、バトラーの提示したサイクルパターンと同調していない、と論じた⁸⁾。Weaver は、グランド・ケイマン島 (the Grand Cayman Islands) について研究を行い、観光旅行者数の動向 (カーブ) はバトラーのリゾート地域の [サイクル] モデルから相当偏っていること、とくにローカル性の程度に応じて大きくなること、などから多くの問題点や限界をかかえていると、指摘している⁷⁾。Gtze も、バトラーのリゾート地域のサイクル論をナイアガラ滝の観光開発の事例研究に適用して、多くの点で相違があることを強調している¹⁰⁾。

以上の、[バトラーによる]リゾート地域のサイクル論を現実のリゾート地域に適用してその可能性を考察した研究成果から導き出された主な結論は、容易に解決ができないような多くの問題点や限界を抱えていることである(より詳細な議論は Agarwal¹⁶⁾)。とくに、その解決を困難とする背景要因には、リゾート地域の進展に影響を与える数多くの国内・外の諸要因が関係しているからである。

つまり、サイクル論のカーブ全体の形状は、供給要因—①開発の程度、②交通条件、③行政の政策および④競合する観光旅行者の受け入れ地域という要因—と、需要要因—観光旅行者を受け入れる地域の進展に応じて観光旅行者の行動特性が変化することを含めて—とに依存しているのである¹⁷⁾。このような需要と供給の諸要因の変化が観光受入地域に相当なインパクトを与えることになる [それが観光旅行者のカーブに影響することにつながる]。さらに、国の内外の旅行代理店の活動もまた、リゾート地域のサイクル

のカーブに影響を与えている。サイクル論のカーブに影響を与える内部的な要因についてみると、[観光開発に係わる]プランナーや管理運営者は、リゾート地域のサイクルの各段階に応じて決断する必要がある⁹⁾。Getz も言うように、

成長や成熟の段階から入込数の低下を防ぐような変化に対する運営管理を行う必要がある。彼らは、観光旅行者の減退状況をにらみ、観光産業の若返り策が必要かどうかを考えながら、決断する必要がある¹⁰⁾ (P753)。

また、サイクル論のカーブに影響を与える外部的な要因には、Debbage や Bianchi の研究によると、多国籍企業の存在がある¹²⁻¹⁸⁾。また Ioannides は、リゾート地域の開発に海外の投資グループと州政府との相互関係が影響を与えていると、述べている¹¹⁾。それゆえ、サイクル論のカーブに影響を与える国内・外の要因には、予期できない性質および変動が大きいという特質を内在しているため、リゾート地域のサイクル論をリゾート地域全体の進展や開発に適用することは、極めて難しい問題となる。

かくして、バトラーのサイクルモデルは、特殊なりゾート地域にあてはまるものであり、したがって一般的なりゾート地域においては、進化の各段階の長さが変化することになり、また形状やパターンもそれぞれに異なることになる。このことは、Hovinen によって明確に認識されている。彼はリゾート地域のサイクル論の後半の段階において、リゾート地域がたどる変化のうちの、「成熟」と「停滞」の段階を一つの成熟している段階 (a single stage marking maturity) に置き換えている³⁾。Haywood は、それと対照的に、バトラーモデルの普遍化に反対して、様々な進化のカーブを示すリゾート地域がありうる、ことを示唆している¹⁸⁾。それに加え、バトラーサイクル論は運用する上でも困難が多いという批判がある。バトラーのサイクル・モデルを構成する要素の多くは、Haywood が考察を加えているように¹⁹⁾ 不明確 (ill-defined) である。しかも多くのリゾート地域において長期にわたる観光旅行に関するデータが不足していることも、[バトラーのサイクル論を] 採用する際の課題となっている。とくに、サイクル論を研究する際に地域の範囲を規定する上で重要な「分析の単位」(the 'unit of analysis') が明確でない。

つまり、バトラーのサイクル・モデルは、地理的なスケール [範囲] を考慮していない。しかもリゾート地域は、サイクルを構成する色々な要素 (ホテル、テーマパーク) がモザイク状になっておりそれぞれがライフサイクルをもっている地域であることを認識していない。すなわち、バトラーのサイクル論はリゾート地域を単一の旅行商品から成り立っている地域とみなしているのである。それゆえ、[サイクルを構成する色々な要素の] あるものは成長を示し、また他の要素は衰退を示すかも知れないのである [したがって、それぞれの要素ごとにサイクルを考える必要がある]。

リゾート地域に関するサイクル論に対してこのような批判があるにもかかわらず、バトラーのサイクル論（モデル）は、観光受入地域で生じる変化を理解する際のフレームとして注目されている。つまり、このバトラーのモデルは、特定のリゾート地域で生じるライフサイクルを規定する地域内外の要因とその変化の過程とを、同時に考慮できる点に特徴がある¹¹⁾。最近、サイクル論の研究がかなり増えてきており、リゾート地域の変容を解明する上で多くの示唆を与えるようになってきた。とはいえ、実証にもとづいた詳細な分析はまだかなり不足しており、したがって [バトラーの] サイクルモデルを現実のリゾート地域に適用するには解明すべき点がまだ残されている。

3. バトラーサイクル論の適用可能性の検討——イギリス；Torbay

(1) Torbay の適用理由

イギリスの最も良く整備された海辺リゾート地域である Torbay³⁾ を詳細に分析することによってリゾート地域の発展を経験的に検証するものである。Torbay が、バトラーのサイクル論が実証研究に選定された理由は、いくつかある。

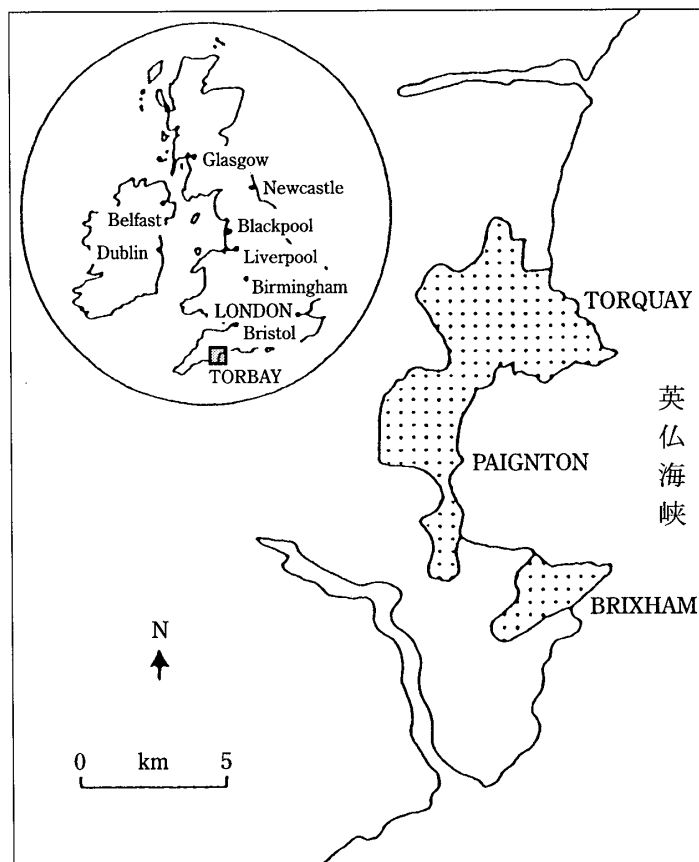


図2 Torbay の位置

第一は、Torbay が英国の南部海岸に位置し（図 2）、3つの観光地域（Torquay, Paignton, Brixham）¹⁴⁾ から成り立ち、Torbay は手頃の大きさを休暇用のリゾート地域として人気がある。すなわち、ウエスト・カウンティ（West Cuntry）の中で観光リゾート客が最も多い地域であり、イギリス全国の海辺リゾート地域で第3位に入込数の多い地域でもある²⁰⁾。

第二に、Torbay の地域経済は、観光旅行業に深く関わっている。年に3億ポンドの売り上げと少なくとも16,000人の仕事を生み出している²⁰⁾。第三は、バトラーのサイクルモデルの適用が、これまでイギリスの海辺リゾート地域の分析に行われてこなかった。この[Torbay にサイクル論を適用するという]研究は、その実証面からの研究の空白を埋めることに役立つだけでなく、国内リゾート活動の理解を深める際の理論的な示唆を増やすことに、役立つのである。

[リゾート地域に係る]原資料や二次資料を用いて、Torbay のリゾート地域の進化や開発状況について広範な研究を行い、そこから Torbay における観光の特性や開発パターンの変容を研究する。これらから得られた知見は、ライフサイクル・モデル全体のフレームの検討に役立てられる。

【リゾート地域サイクル・モデルの適用：運用面の課題と制約】

[Torbay のリゾート地域の進化を研究するため]バトラーのサイクル・モデルを体系的なフレームとして利用する場合には、運用面で多くの問題点が生じている。その第一は、データ面の制約であり、第二は実証面の難しさである。サイクル論を現実のリゾート地域に適用する際の最も重要な点としては、以下のものがある。

① サイクル論の一時的な中断問題：

観光旅行に関する情報[データ]が途切れることは避けがたいことであり、Torbay においてもリゾート地域の進化の初めから現在までの全期間にわたり、観光旅行データを記載した単一の資料は存在しないのである。それゆえ、海辺リゾート地域での休暇活動にもとづく利用の動向を考察したり、また時代とともに進化してきた観光旅行産業の推移を確証するためには、多様なデータを検証する必要がある。Torbay の観光旅行産業の変遷に関する情報源は、主に6つから成り立っている。それらは、二次的な歴史資料、地方新聞、議会議事録(council minutes)、リゾート地域に関するガイドブック、議会が編集した統計書、計画申請書と記録資料、の6つの資料である。これら各資料から得られた断片的な証拠を分析して、Torbay の観光旅行産業の成長や発展の推移が再現される。

② 分析の空間的範囲：

データの中断という制約に加えて、考察の範囲や精度 (the scope and depth) が、利用できるデータの空間的な範囲によって規定されるという問題もある。観光旅行産業の過去からの動向を再構築する上で役立つ統計データは、大体において地方や郡レベルの範囲に対応している。局地的なリゾート地域の単位 [範囲] で、利用できる量にかかわる情報は少ないため、リゾート地域において詳細な変化を検証する際に問題が残されている。

③ 統一基準の不足：

観光旅行産業に関する情報の [収集や作成等には] 統一的な基準がなく、そのため利用—とくに統計データの利用—を制約している。つまり、様々な調査主体によって編集されているデータ群は、必ずしも同じあるいは類似の基準によって編集されているわけではない。そのため、休暇における活動の傾向やパターンを考察する際に、単一の資料だけを利用することは難しくなる。さらに、データの収集方法においても時に [変更や] 修正を受けており、その結果として、リゾート地域の変化やその傾向を時系列的に分析することはできなくなる。このことは、リゾート計画局 (the resort's Planning Department) が編集した入込数の統計にも表れている。すなわち、その統計資料によると1940、50、60年代の入込数は、ハイシーズンのピーク人数のみが記録されている。他方、1970年代以降の入込数は月別の記録となり、年間の入込総数は出版もされている。このような問題は、さらにデータ収集の範囲が時とともに変化するという点からも煩わしさを増すことになる。1968年の地方行政の再編以前には、Torquay Paignton 及び Brixham の各リゾート地域 (この3地域は今日の Torbay を構成している) が、それぞれの地域の範囲で観光旅行の運営、開発、統制の責任をになっていた。しかしながら、1968年以降は3つの地域にあった観光旅行センターが合併され、その後の観光関連のデータは、Torbay という拡大したリゾート地域 (the enlarged resort) に関係したものだけである。

④ データの確実性・信頼性：

統計データは、データにしばしば見られるように過失 (errors)、脱落 (omissions)、見落とし (oversights) という問題を引き起こす傾向がある。このようなことは、観光旅行産業の大きさや価値をあらゆる空間範囲で [分析を行い] 検証する統計に明らかに見られる。イギリスにおいては、このような観光旅行に関する統計データの数値は、登録された宿泊施設のサンプリング調査にもとづいており、しかもその統計数値から宿泊施設として正式に認められていないものは除外されている。[このことは実際の宿泊者数と統計数値との間に差異があることを示している]。したがって、リゾート地域において1

泊以上の宿泊総数を計測するためデータを収集しても、それは信頼できないのである。このことはリゾート地域の定義〔範囲の取り方〕の不明確さに起因している。リゾート地域に関する公的な評価は、すべての海岸地域や内陸にある温泉地域（その多くは経済活動の代替的な形態として整備されたものである）をふくむだけでなく、他の観光旅行の活動拠点（幌馬車、キャンプ場および休日用パーク：そのすべては伝統的なリゾート地域の外延部に位置している）をも組み込んでいる。それゆえ、そのようなデータの信頼性には課題が残されている。多くの場合、このようなレジャー関連の施設は、それぞれが休日の活動範囲内に形成されており、そのメインとなるリゾート地域からは概して離れて立地している。

〔観光旅行関連データの〕信頼性を確認し、実際に利用する上で、新聞や議会の記録にも留意する必要がある。地方新聞のレポート記事は、議会の政策に対して推進的なもの、あるいは反対的なものがある。それゆえ、新聞記事は、観光旅行産業に関連する論争（tourism-related issues）に対して偏った見方をもたらすことになるかも知れない。議会の議事録やデータに関しても同様の偏りをもたらしがちである。すなわち、議会の議事録には最悪の場合に、議会のイメージや信頼性に不利益を与えるような反対側の詳細なデータ（記録）が無い場合、あるいはその逆の場合があるからである。

⑤ リゾート地域サイクル・モデルの評価基準：

観光旅行のデータに関連する上記のような課題に加えて、その〔バトラーの〕リゾート地域のサイクルモデルを Torbay の進化状況に適用する際には、多くの困難な点が生じている。つまり、長期にわたって年間の観光入り込みのデータを利用することができないために、確信をもってY軸〔評価軸〕に目盛りをつけることができなかったことである。リゾート地域の発展や進化を証明するために、バトラーのリゾート地域サイクル論を用いる際にもまた、各段階の転換点を示すような特別なデータを確定しようとする時にも大きな問題となった。実際には、〔各段階の変換点を示すような〕不連続な破裂点〔断絶する点（a discrete break point）〕がない。それだけでなく、むしろ数年間にわたって変化が徐々に起こる場合には、各段階の始点と終点とを明確にすることが不可能となるのだ。この困難な状況を示す良い事例としては、Brixham の場合がある。つまり、Brixham の段階について特徴をみると、「開発発展」と「成熟」の局面においてその始点と終点との区分が明確にならないのである。それゆえ、1950年から1975年にかけての単一のデータをもとにして、この2つのステージをカバーするものとして割り当てることで処理された。

ライフ・サイクルの各段階を確定し、その〔起点や終点の〕変換点を決定する試みは、Torbay を構成している3つのリゾート地域のそれぞれの起点の時期や開発発展の程度が大きく異なっているという事実によって（表2）、一層複雑なものとなった。そのた

表2 リゾート地域の発展段階——Torbay の場合

段 階	Torquary	Paignton	Brixham	Torbay
探 検 段 階	1760-1830年	1790-1870年	1880-1920年	1760-1920年
関 与 段 階	1831-1910年	1871-1918年	1921-1950年	1831-1950年
開 発 発 展 段 階	1910-1950年	1919-1950年	1950-1975年	1910-1975年
カウンティ議会として統合したもの				
成 熟 段 階				1950-1975年
停 滞 段 階				1976-1985年
停滞段階以降				1986年から

め、3つのリゾート地域は、それぞれ独自に発展を開始したが、その後の開発発展は同じ道筋をたどっていると考えると、「探検」「関与」「開発発展」および「成熟」の各段階の時期を総合的にみて決定した。その結果、Torbay に関してはおよそ各段階の始点と終点を設定することになった。Torbay に含まれる3つそれぞれのリゾート地域について、各段階ごとの期間 (time-span) が決められた。それゆえ、Torbay という地域全体としての開発発展と関連づけた各段階の長さ、Torbay、Paignton および Brixham のそれぞれの開発発展の段階との間に、相当な期間の重なり合いが存在している。

以上のことを要約すると、バトラーのライフサイクル・モデルを Torbay の観光旅行の成長や発展の状況に適用する際には、運用面で数多くの課題が現れてきた。すなわち、バトラーのライフサイクル・モデルを運用する場合に、各段階の区切りやその長さはリゾート地域によって異なるため、「分析の単位」のとり方が重要となる。さらに、Torbay において観光旅行者の人数に関して「長期にわたる」詳細なデータが不足するため、バトラーのサイクルモデルにみられる成長カーブを再現することは不可能となった。かくして、本論の後半では、バトラーのリゾート地域サイクル論をとりまく論争について述べる。すなわち、バトラーのサイクルモデルを適用することの可能性を評価するものであり、Torbay で展開されている「イベント」の導入とバトラーが提案している各段階の特徴とを対比させて検討する。

【適用可能性の検証】

(1) 探検段階：1760-1920年

バトラーのリゾート地域サイクル論が暗示するように、Torbay というリゾート地域を初めて訪れた観光旅行者は特殊なタイプの人であり、Torbay 地域の個性的な自然環境の特徴に引きつけられて入り込んでいる。このことは Torquay においても明白な事実であり、3つのリゾート地域の中で一番最初に開発された場所である。主に個人が、Torbay の健康に良いとされた気候と海水があり、それにもとづき公認された医療面の

効用にひきつけられてやってきた場所でもある。Paigntonの「探検段階」は、Torquayが発見されたことを契機にして、それより少し遅れて始まった。すなわち、1830年代になって個人が夏にやってくるリゾート地域として大いに発展してきた²¹⁾。他方、Brixhamは19世紀の後半になるまで、訪問者を引きつけることはなかった。しかしながら、この3つのリゾート地域に関する情報は不足しており、そのため開発当初の概略データですら確認することができなかった。

(2) 関与段階：1831-1950年

観光旅行者の人数は、「関与」段階になって増加するようになり、またこの3つのリゾート地域において、宿泊施設や娯楽施設が整備され、交通のネットワークが改善されたことを、明らかに確認することができる。Torquayにおいては、1859～1879年にかけてその町中で急速に建造物の建築が認められるようになった。他方、Paigntonにおいてはインフラストラクチャーのかなりの部分が1871～1918年にかけて構築されるようになった。

1884から1888年にかけて、地元の行政当局（Local Board）は187件の新規住宅計画を許可した。このような高い成長率は、世紀の変わり目の時期になっても維持されてきた。すなわち、90軒の住宅が1901年に、78軒が1902年に建造されている²²⁾。Brixhamでは、第一次世界大戦の結果、水産業が衰退したことから、町で観光旅行産業が伸長するようになった。すなわち、1930年代の中頃になると、数多くの賄い付きの下宿屋が漁村で2倍の多さになった²³⁾。

(3) 開発発展段階：1910～1975年

3つのリゾート地域のいずれにおいても、バトラーのサイクル・モデルが暗示しているように、次々に新たな観光旅行者向けの施設や観光対象物〔資源〕が提供されるようになった。例えば、Torquayでは、1913年に行政によって魅力のあるアメニティ投資計画が策定された。1920年代から1930年代にかけて、相当な財政投資が続けられてきており、1938年までに総額34,000ポンドが、リゾート地域の内部とその周辺部において観光関連施設の建築や改善のために費出されてきた。さらにこのTorquayというリゾート地域での発展は、明らかに公的なものと非公式〔私的〕なものを含めて、地域の宿泊施設の拡充を反映したものである。Morganによると、1930年代の後半になると、このリゾート地域の住宅の半数は、サービスの良い宿泊施設の形態をとるようになり、ピーク時には長期滞在する観光旅行者数が15万人を数えるようになった²²⁾。

またこの開発発展段階になると、バトラーのリゾート地域のサイクル・モデルが提示しているように、この3つのリゾート地域のいずれもが、リゾート地域の売り込みやマーケティング活動に相当な投資を行っている。Torquayでは、局地／郡地域および全国

向けのそれぞれの新聞にリゾート地域の広告を行い、それに加えて、Torquayの売り込みを主目的とした開発委員会を (Development Committee) 1902年に創設した。この開発委員会の最初の仕事は、1908年に公式のタウン・ガイドブックを発行することであった。これに加えて、バトラーのサイクル・モデルが予言しているように、Torquayでは「開発発展」段階において、頻繁に訪れる訪問者のタイプに変化が見られる、という特徴を暗示する証拠がある。つまり、Torquayでは、第二次世界大戦以前の時期までが「貴族社会の時代‘gentry era’」の最後の時期と見なされる。Travisによると、この時期のTorquayがそれまでの一流の海水浴場 (a select watering place) であることを止め、夏のシーズンを中心に「休暇旅行者向け」のリゾート地域 (a holiday resort) として発展した時期でもある。その結果、多くの中産階級や労働者階級の人々がやってくるようになった²¹⁾。

(4) 成熟段階：1950-1975年

バトラーのサイクル・モデルが予測しているように、「成熟」段階は繁栄の時期として (a period of prosperity) 特徴づけられる。第二次世界大戦の終了後に、3つのリゾート地域のすべてにおいて観光旅行産業が一般的に発展してきた。このことは1945-1949年にかけて地方新聞の Herald Express に書かれている数多くの記事の中に証明されている。バトラーのサイクル・モデルの予想と比較してみると、この段階の観光旅行者の人数は定住人口の大きさを越えている。ピーク・シーズンになると、Brixham や Paignton のそのピーク時の人口は2倍に増え、また Torquay のそれは2/3倍余計に増えてきた²²⁾。しかし、このことは Torbay の海辺の観光旅行において、表面的には観光旅行者数が上昇しているかのように見えるが、3つのリゾート地域のいずれにおいても、1955から1975年にかけて、国内の休暇旅行市場に占める割合は一貫して減少している。この3つのリゾート地域において国内の観光旅行者の入り込みの比率が低下したことは、以下の事柄からも明らかになる。つまり、1960年代の後半に、イギリス政府観光庁 (the British Tourism Authority) は、観光旅行者数が低下した潜在的な要因を確認し、サウス・ウェスト地方を [これまでの] 積極的な太陽指向型の休暇活動の場所として力点を置かない方向に転換し、そして、パッケージ型の観光旅行と競争するために、宿泊施設や娯楽設備の [質的な] 基準を大きく引き上げることがを要望していること、からも推察できる。

バトラーのリゾート地域サイクル・モデルを反映したように、海辺のリゾート地域が成熟段階になると [サウス・ウェスト地方の] 局地や郡地域の経済に対して重大な影響をもたらすことになった。1967年に Devon 地方に¹⁵⁾ おいて、休暇旅行者による費出は総額で10万ポンドに達した。他方、その同じ年の6月に、Torquay と Brixham の従業員の20%以上が、ホテルと食事関連産業に雇用されていた²⁴⁾。その結果 [Devon 地方におい

て]、経済の主要な部分が観光旅行に結びつけられようになり、そのためマーケティングや広告宣伝活動が広く展開され、この3つのリゾート地域のすべてがプロモーション活動に深く依存するようになった。1945年に、Torquayでは広告宣伝委員会(Torquays' Publicity Committee)が設立され、1955年にはPaigntonが全国的な共同の広告宣伝キャンペーンに参加するようになった。1960年になって、Torquayも全国的な広告宣伝キャンペーンに乗り出した。

バトラーが暗示しているように、「成熟」段階になると、地元住民の中に観光旅行者に対して敵意を持つような人が増えてくると言われている。しかし、このような「地域住民の反発という」特徴が、この「Torbayの」ライフサイクルの早い時期に出現してきたということを示すような証拠は、見当たらない。1950年代になると、地方新聞Herald Expressは地域で強い関心を呼んでいる住民の怒りについて多くの記事を集めている。その住民の怒りとは、直接的には観光旅行産業が引き起したコスト高(物価高騰)に関するものである。また、観光旅行者が殺到することによって引き起こされる深刻な交通渋滞も地域住民の不満の種であった。地方新聞(1955)Herald Expressは、休暇旅行シーズンに交通混雑を緩和するような交通渋滞の解消を求める地域住民の要求内容、を掲載している。このことは1960年代から1970年代にかけて幾度か報道されてきた。しかしながら、「それ以上に」観光旅行産業全体に対して地域住民が立腹している要因は、観光旅行産業がもたらす雇用面において季節変動が大きいという影響である。夏期と冬期との間における雇用面の著しい相違「ギャップ」が、1958年の地方新聞Herald Expressに報道されている。それによると、当時、Paigntonにおける失業率は夏期の休暇シーズンになると15%にまで低下していた。1970年になると、Herald Express(1970年7月)には、「冬季の失業問題‘winter workless’」が掲載されるようになった。Torbayにおいて地域の定住者が、「Herald Expressによると」より多様な雇用の機会を提供することを繰り返し要求していた。1970、1980および1990年代を通してこの雇用の「季節変動」はTorbayの議会にとって、たえずつきまとってきたジレンマであった。

(5) 停滞段階：1976-1985年

それ以前の段階と比較してみると、Torbayでは「停滞」段階に関連する特徴の多くを確認することができる。バトラーのサイクル・モデルが予測したように、Torbayにおいては1970年代の中頃に観光旅行者数がピークを迎えたようであり、この時期が「成熟」段階から「停滞」段階にかけての転換点を示している。1970年代の後半から1980年の初期にかけて、イギリスの国内観光旅行が全国的に低迷した時期と特徴づけられた。Torbayはウェスト・カントリー地方で最も人気のあるリゾート地域の一つであり、Devon州全体の休暇旅行者の33.6%を数えているにもかかわらず、Torbayはそのリゾート地域としての発展を逆もどりしたような「経済的なたそがれ(economic gloom)」による

損失を被ることになった (HeraldExpress June 1976)。つまり、1978年から1984年にかけて、Torbayはそのリゾート地域を訪れる休暇旅行者数が大幅に減少し、1982年には1年を通して低迷し、この年の観光旅行者総数は1千万人に落ち込んだ²⁵⁾。バトラーのサイクル・モデルが暗示しているように、観光旅行者の入込み比率〔変動率〕も季節によって激しく変動し、しかも休暇旅行のシーズンの平均的な滞在期間も、1977年の18.5週から1982年の16.2週に短くなった²⁵⁾。さらに、ホテルの稼働率 (hotel occupancy rates) は70%を切り、1977年の13週から1983年の7週に低下した²⁶⁾。

バトラーの予測にしたがうと、Torbayもまた観光旅行関連施設の環境整備において、相当に物理的な悪化をもたらすようになった。つまり、ベット数が余りすぎていることが、Torbayのリゾート地域を特徴づけるようになり、ホテルやゲストハウスを高齢者の個人住宅に転換するなど、余剰となっている宿泊施設を徐々に別な用途へ転用するようになった。1981年から1988年にかけて、〔宿泊施設を他の用途に転用することにより〕Torbayにおいて観光旅行者専用の宿泊用ベット数は、7,930床にまで減少したが、そのベット数減少の大半は、Torbayのホテルとゲストハウス分野のものである²⁷⁾。

このことに加えて、バトラーのリゾート地域サイクル・モデルに概観されていたもう一つの特徴も明らかに確認できるのである。つまり、Torbayは流行おくれとの地域イメージが連想させるようになってきた。このことは、イギリス観光旅行公社 (English Tourist Board: 1982) が行った全国的な調査結果に示されている。つまり「Torbay」の位置を知っているのは回答者10名のうちわずか2名にすぎず、しかもTorquay、BrixhamおよびPaigntonのそれぞれのリゾート地域と名前とを関係づけができたのも2名だけであった²⁸⁾。この〔知名度の低い〕ことが、観光旅行者の人数を維持するため、一層の努力を払わせることになった。1982年に国内と外国むけに積極的なマーケティングのキャンペーンが開始された。他方で、Torbayを「イギリスのリヴィエラ (the English Riviera)」^[6] というブランド名—これはリゾート地域としての新しいイメージを創出するために計画されたもの—に改める計画も行われた。

(6) 停滞以降の段階：1986年から現在まで^[7]

最後に、Torbayにおいて展開されてきた「イベント」というキャンペーンは、「停滞以後」の局面でおこなわれており、バトラーのリゾート地域サイクル・モデルにおいて提案されてきた若返り策と良く似通っている。明らかに、3つのリゾート地域はいずれも「直接的な」変化や発展の道を辿ることになった。〔Torbayにおける〕「停滞」局面からの転換(点)は、1980年代の中頃に生じており、その転換とは、Torbayにおいて海辺リゾート地域を再生するため、いくつかの共同あるいは協調による取り組みが行われた点に特徴がある。1986年にTorbayは、国の観光競争力強化計画「リゾート2000」—イギリスの観光公社が、それぞれのリゾート地域の観光リゾート市場における位置づけを戦

略的に取り組むように促すもの一を受けて、イギリスで運用された「第一次観光発展行動計画」(TDAPs)の一つを採択することとした。その観光発展計画の最も重要な目的は、国の内外の観光市場と競争して勝つために観光旅行産業を再生することであり、そして観光開発を促進すること、雇用の機会を増やすこと、および新たにレジャーやレクリエーションの施設を提供すること、に焦点が当てられていた。[そのために]公共と民間との多方面にわたるパートナーシップ(協調体制)が考え出され、その協調体制によって3つのリゾート地域のそれぞれにおいて、かなりの進展が図られた。例えば、Torquayにおいては、[地域にある]パビリオン(Pavilion)がファッショナブルな小売業の複合施設に変換され、Torquay'sの外港にある460のマリーナが撤去され、イギリスのリビエラ・センター(会議室や娯楽設備のある展示施設と結びつけて)が数百万ポンドで1987年に開設された。このような公共と民間との協調体制は、Hollywood Bowl(ボウリング場)の複合施設および1988年の人工的なスキー場の建設ですでに試みられている。1990年に、Paigntonでは約3500万ポンドの費用で休暇村(a holiday village)を建造する計画が発表され、Brixhamでは主要な開発が埠頭の周辺で行われるようになった。

TDAP(観光発展行動計画)と共同して様々な開発計画が展開されるようになると、広報宣伝のキャンペーン活動もまた強力に押し進められた。この宣伝キャンペーンには、いくつかの全国新聞の日曜版に新聞報道するもの、またMidland地方—Torbayの主な誘客の範囲である一を対象としたラジオ・キャンペーンが含まれていた。年間のマーケティング戦略が公けにされ、また特別なイベントのためのプログラムも組織的に展開されるようになった。Torbayは、[このように]変化している観光旅行のパターンに適合しようと努力してきたリゾート地域の一例である。Torbayは、そのような観光旅行市場に対するアピール[の内容]を、[従来までの]伝統的な「子供が砂遊びができるリゾート地域」^[8]としてのイメージから、はるかに優雅で洗練された、そして大陸的なスタイルのイメージをもつリゾート地域へ、と切り換えてきた。

1990年に観光発展行動計画が正式に終了したにも係わらず、Torbayでは海辺のリゾート[地域]再生のための企画が継続されてきている。1995年になると、10ケ年の観光と経済開発のために戦略が策定され、そこにはマーケティング、商品開発、組織体制づくり、品質やサービスの改善および財務会計のような議題が含まれていた。イギリスのリビエラというマーケティングにもとづくキャンペーンは、1986年に開始され現在のところ12年目に入っており、また、1990年代の初期に設立されたイギリス国内外の観光旅行者向けのマーケティング活動は現在も続いている。ごく最近になって、地方でも観光旅行の海外市場に焦点をあててマーケティング活動としてのキャンペーンが展開されるようになってきた。このTorbayでは観光開発の面でも重大な検討課題が残されている。それは、観光旅行者を「引きつける」魅力あるものを開発しようとする提案であり、現在、その詳細な実現可能性を探るための事前調査が行われている。

今後の発展のためのステージの特徴

Torquay、Paingnton および Brixham において、それぞれのリゾート地域としての発展 [内容] と、バトラーによって提示されたリゾート地域の整備 [内容] との間には、ある程度の類似性が見られる。が、[開発の程度は]リゾート地域によって偏りがあることも確かである。バトラーのリゾート地域サイクルモデルの予想に反して、Torquay では、「探検」、「関与」および「開発発展」の各局面において、観光旅行産業の発展に地元住民が前例にない程に関与してきた、という証拠がある。この局地レベルで地元住民が関与することは、19世紀と20世紀を通して続けられてきたものであり、[観光旅行産業の]発展の大部分は、地域にある企業や地方自治体によって行われてきたものである。

バトラーのリゾート地域のサイクルモデルに照らして明らかになったもう一つの [開発の程度に見られる]偏りは、Paingnton に関連した事柄である。つまり、リゾート地域としての発展段階を [Paingnton について]見ると、訪れてくる観光旅行者のタイプが発展に応じて変化してきた、ということを示唆する根拠が見当たらないのである。[Paingnton は]冷たい風に晒されるため、健康に良いリゾート地域として売り出すことに適していないので、Paingnton は当初海辺・リゾート地域として計画され、開発されてきた。つまり、19世紀から20世紀にかけて、Paingnton の砂浜は、どちらと言えば「子供が砂遊びのできる海辺の休日」に関心をもっている人々の間で人気を博した。その結果として、同じようなマーケットを提供し、当初受け入れた人々の関心を引きつけた。

しかしながら、バトラーのリゾート地域サイクル・モデルの適用可能性に関していえば、最もあいまいさが残るのは、最後の「停滞以降」の局面に関してである。バトラーのリゾート地域サイクル・モデルについてその概略が明らかにされているが、その誕生から消滅までの決定論的な概念には特に問題がある。バトラーのリゾート地域サイクル・モデルが暗示しているような、挽回不可能であるような衰退が出現することを示す証拠は、Torbay 地域には見当たらない。[Torquay、Brixham や Paingnton の] 3つのリゾート地域のいづれにおいても、「停滞以降」の局面において一絶えず変化している市場の要求や期待に応えるために、積極的な回復策をとり、新たな方向をさぐるという、特徴をもっている。「停滞以降」の局面に突入した後に、その停滞の程度に応じてリゾート地域全体として [入込人数の] 低下傾向に歯止めをかけるために、対策をとることの必要性が強調されるべきである。[それゆえ] バトラーのリゾート地域サイクル・モデルの予想とは対照的に、衰退という段階は、[低下の歯止めとして積極的に回復策を講じるため] バトラーのサイクルの停滞以降の段階における一つの選択肢とはならないのではないだろうか。

【結 論】

観光地域の進展に関するモデルについての概念は、観光開発理論の一般理論—観察から得られた傾向や量的な指標を組み込む基礎となるもの—の基礎として、受け入れられてきた¹²⁾。とくにバトラーのライフサイクル・モデルは、様々な文脈や観光旅行産業を取り巻く環境に応じてリゾート地域の成長や発展を記述する際に広く用いられている。[このような内容を含む] 相当数の研究があるにもかかわらず、バトラーのサイクル・モデルの適用可能性についてはまだ広く受け入れられていないようだ。バトラーのリゾート地域のサイクルモデルを Torbay の海辺リゾート地域に適用することによって、本論は数多くの重要な運用面、実証面および理論面の論点に焦点をあてたものである。バトラーのサイクル・モデルのもつ運用面の効用についてみると、「分析の単位」が決定的に重要な問題となっていることが明らかになった。Torbay にある3つのリゾート地域のどれも、開発発展のタイミングやその速さについてみると大きく異なっていた。それゆえに、バトラーのサイクル理論が上手く適用できるような地理的な範囲は、限られたものになる。

バトラーのリゾート地域サイクル・モデルについて、実証面からその有効性を見ると、Torquay、Paignton および Brixham のリゾート地域におけるダイナミックな動向と極めて似通っている、ことが明らかになった。また [その3つのリゾート地域が合併した] Torbay について見ても、バトラーが提案したサイクル・モデルと似通っていること、も明らかになった。しかしながら、バトラーのサイクル論とは幾つかの点で乖離〔相違があること〕も確認できた。[リゾート地域サイクル論の] 最大の意義は、[実証面からみて] リゾート地域の進展状況に応じて若返り対策を図ることに重大な役割がある。[リゾート地域の] 再生には継続的なプロセスが必要である。つまり、リゾート地域は、競合しているリゾート地域や絶えず変化している観光旅行市場の動向に遅れをとらないように、観光旅行商品について絶えず見直しを行い、その若返りに配慮しなければならない。さらに、この実証的な研究は、主に伝統的なイギリスの海辺リゾート地域と関連づけて検討したものであるが、そこで見出された知見も、「パッケージ化された休暇旅行者向けの」国際的な観光リゾート地域と深く関わりをもっている。Torbay のリゾート地域では、バトラーが予想したように、必然的な衰退を回避するために、最近、旅行商品の見直しを行っており、しかも近い将来においても絶えず旅行商品の吟味を続けなければならない。

この点に注目すると、「停滞以降の」段階については、理論的な再構築の必要性が高まっているとすることができる。バトラーが提唱している現在のサイクル・モデルのままでは、そのまま段階的な進展のプロセスをたどるとする研究に適用することはできない

し、また現実の海辺リゾート地域で生じている変化の探究に活用することもできない。それゆえ、リゾート地域のサイクル論の一層の研究のためには、バトラーのリゾート地域サイクル・モデルの議論に、最終的な「停滞以降の」局面を再評価し、加えることが肝要である。

【謝 辞】

Tim Whitehead、Torbay 自治都市の議会、および Torbay 図書館の手助けと協力に感謝を申し上げたい。さらに貴重なコメントをしていただいた Elspeth Fyfe 女史にも感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) Butler, R. W., The concept of a tourist area cycle of evolution: implications for management of resources. *Canadian Geographer*, 1980 **24**(1), 5-12.
(中崎茂訳「観光地域の発展と衰退—バトラーのライフサイクルモデルの紹介」、流通経済大学、社会学部論叢、8-2、1998年)
- 2) British Resorts Association. *Perspectives on the Future of Resorts*. Place of publication unknown, 1989.
(中崎茂訳「観光地域サイクル論のランカスター郡における検証」、流通経済大学、社会学部論叢、10-2、2000年)
- 3) Hovinen, G. R., A tourist cycle in Lancaster County, Pennsylvania. *Canadian Geographer*, 1981, **25**(3), 283-286.
- 4) Meyer- Arendt, K. J., The Grand Isle, Louisiana resort cycle. *Annals of Tourism Research*, 1985, **12**(3), 449-465.
- 5) Wilkinson, P., Tourism in small island nations: a fragile dependence. *Leisure Studies*, 1987, **26**(2), 127-146.
- 6) Strapp, J. D., The resort cycle and second homes. *Annals of Tourism Research*, 1988, **15**(4), 504-516.
- 7) Weaver, D. B., Grand Cayman Island and the resort cycle concept. *Journal of Travel Research*, 1990, **29**(2), 9-15.
- 8) Cooper, C. P., and Jackson, S., Destination life-cycle: the Isle of Man case study. *Annals of Tourism Research*, 1989, **16**(3), 377-398.
- 9) Pearce, D. G. *Tourist Development*, Longman, New York, 1989.
- 10) Getz, D., Tourism planning and destination life-cycle. *Annals of Tourism Research*, 1992, **19**(4), 752-770.
- 11) Ioannides, D., Tourism development agents: the Cypriot resort cycle. *Annals of Tourism Research*, 1992, **19**(4), 711-731.

- 12) Bianchi, R., Tourism development and resort dynamics: an alternative approach. *Progress in Tourism, Recreation: and Hospitality Management*, 5. Wiley, Chichester, UK, 1994, pp. 181-193.
- 13) Smith, R. A., Beach resort evolution: implications for planning. *Annals of Tourism Research*, 1992, 19(2), 304-322.
- 14) Snow, R. E. and Wright, D. E., Coney Island: a case study in popular culture and technical change. *Journal of Popular Culture*, 1976, 9(4), 960-975.
- 15) Baker, R. J., *An Analysis of Urban Morphological and Tourist Precincts within Selected Coastal Resorts of the Port Stephens, Great Lakes Area, New South Wales*. M. A. thesis, University of England, New South Wales, 1983.
- 16) Agarwal, S. J., The resort cycle revisited: implications for resorts. *Progress in Tourism Recreation and Hospitality Management*, 5. Wiley, Chichester, UK, 1994, pp. 194-207.
- 17) Cooper, C. P., The life-cycle concept and tourism. Paper presented to the Tourism in the 1990's conference, University of Durham, UK, 1990.
- 18) Debbage, K. G., Oligopoly and the resort cycle in the Bahamas. *Annals of Tourism Research*, 1990, 17(5), 513-527.
- 19) Haywood, M. K., Can the tourist area cycle of evolution be made operational? *Tourism Management*, 1986, 7(3), 154-167.
- 20) Torbay Tourist Board, *Economic Development Strategy*. Torbay Tourist Board, Torbay, UK, 1995.
- 21) Travis, J. F., The rise of holiday-making on the Devon coast 1750-1900, with particular reference to health and entertainment. Unpublished Ph. D. thesis, University of Exeter, UK, 1988.
- 22) Morgan, N. J., Perceptions, pattenrns and policies for tourism: the development of Devon seaside resorts in the C20th, with special reference to Torquay and Ilfracombe. Unpublished Ph. D. thesis, University of Exeter, UK, 1991.
- 23) Born, A., *The Torbay Towns*. Phillimore, London, UK, 1989.
- 24) Lewes, F. M. M., Culyer, A. and Brady, G. A., *The Holiday Industry of Devon and Cornwall*. University of Exeter, Exeter, UK, 1969.
- 25) Devon County Council. *The First Alteration of the Devon County Structure Plan: A Discussion Paper on Tourism*, Devon County Council, Exeter, UK, 1983.
- 26) Devon County Council, *Devon Tourism Review*. Devon County Council, Exeter, UK, 1984.
- 27) Haywood, N. R., *Appeals, Appendices to Proof of Evidence*. Torbay Borough Council, Torbay, UK, 1989.

- 28) English Tourist Board, *Torbay Tourism Study*, English Tourist Board, London, UK, 1982.

【訳者注】

- [1] バトラーのサイクル論を日本語で解説した主なものは以下のとおりである。
西岡久雄「バトラーとティスデルの観光地域論」、駿河台大学『文化情報学』、3-1、1996年
「『観光と地域開発』、内外出版社、1996年、1章
小沢健市『観光を経済学する』、文化書房博文社、1994年、pp. 217-234
- [2] ホビネンのバトラーのサイクル論の適用研究をもとに、バトラーのサイクル論の課題、とくに衰退段階の判定の難しさが論じられている。
中崎茂「ホビネツによるバトラー・サイクル論の適用可能性の検討」、流通経済大学、『流通経済大学論集』、34-4、2000年、pp. 81-94
- [3] Torbay は (時に Tor Bay とも言われている) 美しいイングランドの美しい Bay に因んで名付けられ、3つの町 (Torquay、Paignton、Brixham) から成り立っている。自然景観と温暖な気候によって、伝統的なリゾート地域として発展してきた。
- [4] Torbay を構成するこの3つの町 (Torquay、Paignton、Brixham) は、夏は海水浴場、冬は逗留地として栄えてきており、Torquay が最も大きい。ちなみに1994年の Torbay の人口は123,900人で、内訳は Torquay が61,700人、Paignton 42,870人、Brixham 19,330人である (Torbay Council のホームページによる)。
- [5] 中世から近代の始めにかけて錫と銅の産地として繁栄し、近年は牧畜牛と観光に比重が高まっている。行政と宗教の中心であるエクシタと軍港・貿易の拠点であるプリマスが、2大都市である。プリマスは「メイフラワー号 The Mayflower」が出帆した港としても知られている。
- [6] イングランド南西部の Torbay の海岸地域を対象に、22のビーチ、閑静な入り江 (secluded coves)、多くの珍しいものを、売り出すためのキャッチフレーズである。
- [7] 停滞以降の時期は、原文 p. 69の表 2 では1985年以降となっているが、これは1986年のミスと思われるので表中の1985年を1986年に訂正してある。
- [8] The Chambers Dictionary によると「a child's beach toy, comprising a sand and water」(子供連れの海辺遊び道具) の意味である。有名なロウル・ダール (Rould Dahl) の短編小説「少年」の中に、1925年当時の海辺の様子を見事に描写した次の一節がある。「ウエストン・スパ・メアは、多少活気のある海浜リゾート地域で、広大な砂浜、巨大な栈橋[観光ピア]、海沿いに平行している遊歩道、ホテル、下宿屋が群れをなしており、さらに無数の小さい店が立ち並び、子供のシャベルやバケツとか、棒飴、アイスクリームなどを売っていた。